顎下腺唾石に合併した扁平上皮癌例

朝日 淳仁・野中 聡・荻野 武・吉野 和美
石田 芳也・今田 正信・林 達哉・原渕 保明

A Case of Squamous Cell Carcinoma with Sialolithiasis of the Submandibular Gland

Atsuyoshi Asahi, Satoshi Nonaka, Takeshi Ogino, Kazumi Yoshino,
Yoshiya Ishida, Masanobu Imada, Tatsuya Hayashi and Yasuaki Harabuchi

(Asahikawa Medical College)

We experienced a case of squamous cell carcinoma with sialolithiasis by metaplasia in the duct of a submandibular gland. A 58-year-old man was referred to our hospital to treat a mass in the oral cavity. There was a sialolithiasis in the proximal part of Wharton's duct. So, we removed the left submandibular gland. Metaplastic change was found in Wharton's duct with calculi, and, in the central part of the metaplasia, well differentiated squamous cell carcinoma was located. Neck lymph nodes were not swollen, so no further treatment was taken. There was no sign of recurrence. We studied the metaplasia rate in Wharton's duct in sialolithiasis patients who had been treated by submandibular gland removal in our hospital. About 90% of patients' metaplasia were found in areas with calculi. We thought that metaplasia in the duct was highly correlated with calculi, and that squamous cell carcinoma might occur on the basis of metaplasia.

Key words : squamous cell carcinoma, sialolithiasis of submandibular glands, metaplasia, calculi

はじめに

唾石症は80%が顎下腺内および顎下腺導管(ワルトン管)に発生する良性疾患である。その治療法は唾石の存在部位に応じて口腔内粘膜よりワルトン管を切開する口内法や顎下腺全摘術が選択される。今回われわれは、顎下腺導管移行部唾石症に合併した導管上皮癌症例を経験したため、当科の過去の顎下腺内唾石症患者に対する組織学的検討と文献的考察を加えて報告する。

症 例

症例: 58歳, 男性。

主訴: 口腔内腫瘍。

現病歴: 2002年10月頃より口腔内の腫瘍を自覚し、徐々に増大してきたため2003年4月25日当科初診した。

既往歴: 大腸ポリープ。

家族歴: 特記すべき事項なし。

初診時所見: 左口腔底部に小豆大の硬い腫瘍を触知し、その部位は双手診にて左顎下腺移行部に一致していた。左顎下腺の腫脹、頸部リンパ節の腫脹は認めなかった。その他、耳鼻咽喉科領域に明らかな異常所見を認めなかった。

単純X線検査所見: 左顎下腺部に円形の石灰化像を認めた(図1)。

CT検査所見: 左顎下腺の腺管移行部に唾石の陰影を認めた。顎下腺に異常は認めなかった。頸部リンパ節の腫大も認めなかった(図2)。

以上の所見から左顎下腺移行部唾石症と診断され、2003年7月28日に全身麻酔下で左顎下腺全摘術を施行

図 1 矢印の部位に単純 Xp にて石灰化病変を認めた。

図 2 矢印の部位に CT 上石灰化病変を認めた。

した。癒着などの所見は認めず、周辺のリンパ節も認められなかった。

摘出物所見：腺管移行部に $8 \times 5 \times 5$ mm 大の唾石が嵌頓して存在していた。摘出した顎下腺に肉眼的な異常所見は認めなかった。

病理組織学的所見：唾石が存在し拡張した導管上皮に扁平上皮化生を認め、その一部に大部分が粘膜内病変で一部間質に浸潤する高分化型扁平上皮癌を認めた(図3)。導管断端および唾液腺剥離面に腫瘍の露出は認められな

かった。また、導管外への腫瘍浸潤も認められなかった。扁平上皮化生を発生母地として癌化した可能性が示唆された。手術操作により扁平上皮癌の切除は完全であったと判断されたので、追加の治療は行わず現在経過観察中である。術後 1 年 6 ヶ月を経過しているが再発を認めていない。

顎下腺唾石症における導管上皮の扁平上皮化生の頻度：顎下腺唾石症患者の導管上皮において扁平上皮化生

a

b

図 3 病理組織学的所見 (HE 染色, 100 倍)

a : 点線より左方が扁平上皮化生, 右方が扁平上皮癌
b : 正常導管部分

表1 腺管移行部唾石症にて顎下腺摘出術施行症例の検討

症例	年齢, 性	有病期間	扁平上皮化生
1	31 男	2Mo	有
2	26 女	1Mo	有
3	39 女	1Mo	有
4	58 男	8Mo	有
5	46 男	6Mo	有
6	71 男	4Mo	有
7	48 男	5Mo	有
8	70 男	6Mo	有
9	29 女	3Mo	否
10	45 男	1Mo	有
11	26 女	16Mo	有
12	58 男	2Mo	有
13	37 男	252Mo	否
14	59 男	不明	有
15	27 男	不明	有
16	53 男	不明	有
17	42 男	不明	有
18	56 男	不明	有
計			16/18 89%

がどのような頻度で発生するのかを検討するため、当院において過去に顎下腺全摘術を施行され、唾石陥頓部位が明らかであった18例の顎下腺唾石症患者の病理組織標本を再検討した(表1)。罹病期間は1ヵ月から252ヵ月であった。18例中16例(89%)に唾石が存在していた部位と一致して導管上皮の扁平上皮化生が認められた。扁平上皮化生が認められなかった2例の罹病期間はそれぞれ、3ヵ月、252ヵ月であった。

考 察

顎下腺唾石症は比較的多い疾患であるが、扁平上皮癌を合併した症例の報告は渉獵しえる限りにおいては1965年にShanonら¹⁾によって報告された1例のみである。その症例は35年間にも渡ってワルトン管に唾石が存在したという持続的刺激により、扁平上皮化生から扁平上皮癌が誘発された可能性を示唆するものであった。今回の症例では罹病期間は約8ヵ月とShanonら¹⁾の報告と比べると短かったが、唾石の存在した部位に一致して導管上皮に扁平上皮化生が認められたこと、さらに扁平上皮化生部位に連続して扁平上皮癌が存在したことを考慮すると

同様の機序が扁平上皮癌の発生に関与したものと推察される。

一般的に扁平上皮化生は子宮頸癌、肺門型肺癌、上顎癌²⁾においては前癌病変と考えられている。それらの発生にはそれぞれ、エストロゲン、喫煙、慢性副鼻腔炎の影響を受けるといわれている。また、結石が管腔器官に陥頓することによって癌が合併した症例の報告としては、尿管結石に合併した腎盂扁平上皮癌症例³⁾や、胆石に合併した胆嚢扁平上皮癌症例⁴⁾などがある。尿路上皮に原発する扁平上皮癌の発生因子としては局所の慢性刺激あるいは炎症が扁平上皮化生をもたらし、ひいては扁平上皮癌を誘発すると考えられている。

われわれの経験した症例は病状期間が8ヵ月と短いにもかかわらず、扁平上皮化生を基盤とした扁平上皮癌を認めたことから、たとえ唾石による刺激期間が短くても導管上皮に扁平上皮癌が発生する可能性はあるものと考えられた。また、摘出物の病理組織検査においては少なくとも唾石の存在していた導管上皮の部位は十分に鏡検し、扁平上皮化生や扁平上皮癌組織の有無を検索する必要があると考えられた。

本論文の要旨は第14回日本頭頸部外科学会(平成16年1月、東京)にて発表した。

参考文献

- 1) Shanon E and Kessler E: Squamous cell carcinoma of Wharton's duct. A case of long-standing calculus. Arch Otolaryngol 82: 633 ~ 634, 1965.
- 2) 小川晃弘: 鼻・副鼻腔癌の病理学的検討; 特に化生及び異形成との関係について. 耳鼻 92: 334 ~ 346, 1989.
- 3) 丸山 聡, 原田健一, 武中 篤: 結石による膿腎症を契機として発見された腎盂扁平上皮癌の一例. 西日泌尿 64: 267 ~ 278, 2002.
- 4) 水島睦枝, 佐藤博道, 伊藤慈秀: 胆嚢の扁平上皮癌; 4 症例報告と本邦 13 剖検例の臨床病理学的研究. 胆と膵 5: 1311 ~ 1318, 1984.

原稿受付: 平成17年12月6日

原稿採択: 平成18年1月18日

別刷請求先: 朝日淳仁

〒078-8510 旭川市緑が丘東2条1-1-1

旭川医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室